

# 県内復興・経済日誌 (2018年1月)

1日

## 《「新・大原総合病院」開院、高度専門医療や広域的救急医療の実現へ》

大原総合病院（福島市）の新病院棟が同市上町に開院した。既存病院の老朽化に伴って建設された新病院棟は、免震構造の鉄骨造り10階建てで、延べ床面積は約2万6,300㎡、病床数は353床あり、コンピュータ断層撮影（CT）装置や磁気共鳴画像（MRI）装置など最新の医療機器の導入のほか、県北の民間病院で初めて屋上ヘリポートを整備した。

4日

## 《3月に県産ヒラメをタイへ輸出》

内堀雅雄知事は年頭記者会見で、「常磐もの」として人気の高い県産ヒラメを3月にも鮮魚としてタイへ輸出する計画を進めていることを明らかにした。実現すれば原発事故以来初めての県産鮮魚の輸出となり、県は安全性や高い品質をアピールできると期待している。

7日

## 《浪江町と富岡町で震災後7年ぶりの成人式》

原発事故による避難指示が2017年春に一部を除いて解除された浪江町と富岡町で、7年ぶりに成人式が各町内で行われた。浪江町の成人式には約110人、富岡町の式には約100人の新成人が出席した。新成人たちは仲間との再会を喜び合い、故郷の復興に対する決意を新たにした。

9日

## 《いわき市漁協など、今年初の試験操業開始》

いわき市漁業協同組合、小名浜機船底曳網漁業協同組合、相馬双葉漁業協同組合は、本県沖で今年最初の試験操業を実施した。各漁協合わせて計24隻が出漁し、そのうち6隻が出漁したいわき市漁協では、底引き網漁でヒラメやキアンコウなど約1.5tを漁獲した。安全が確認された魚種限定で2012年から始められた試験操業は、現在176種類の海産魚介類にまで増えた。

10日

## 《「ミス日本酒」ファイナリストに県代表堀井雅世さん選出》

一般社団法人ミス日本酒は、日本酒と日本文化の魅力を国内外に発信する「ミス日本酒」のファイナリスト23名を発表し、本県代表として初めて堀井雅世さん（埼玉県在住）が選出された。堀井さんは、母親が会津坂下町出身でもあり福島復興への思いが強く本県代表として応募した。現在は気象キャスターとして活躍しているが、今後は県産酒を広くPRしていきたいと抱負を語った。本コンテストの最終選考会は、3月12日に京都市で開催される。

12日

## 《葛尾村でコチョウラン栽培が開始》

震災からの復興に向け、農業復興事業としてのコチョウラン栽培が葛尾村で開始された。同村の3農家と東京の1企業でつくる農業法人「かつらお胡蝶蘭合同会社」が、村が建設した施設の無償貸与を受け栽培にあたる。コチョウラン栽培は収益性が高く、労務負担が軽いのが利点とされる。7月に出荷を開始する見込みで、年間4万8,000株の生産を目指す。

14日

## 《坂下大俵引きは西が勝利、今年は豊作に》

会津坂下町の新春を飾る伝統行事「坂下初市・奇祭大俵引き」が、同町役場前で行われた。下帯姿の男衆が東西に分かれて大俵を引き合い、今年は西が勝利した。五穀豊穡を願う大俵引きは約400年前に始まったとされ、東が勝つと米価が上がり、西が勝つと豊作になるといわれている。

16日

## 《いわき海星高校の新「福島丸」、小名浜港に入港》

県立いわき海星高等学校の海洋練習船6代目「福島丸」（665t）が完成し、いわき市小名浜港に入港した。震災時には5代目福島丸が食料品の運搬や知的障がい者の県外避難などで活躍した。同校の沢尻校長は「本県水産業を担い、災害時の支援活動にも貢献できる若い人材の育成に新しい船を活用したい」と語った。

18日

## 《郡山産コイ、ヤフー社員食堂で提供》

郡山市の農水産物を応援しようと、IT大手

のヤフー（東京千代田区）は、本社社員食堂で「郡山市鯉フェア」を開催した。同食堂では郡山産のコイを使った天井「恋する鯉井」やコイのあらい、郡山産米「あさか舞」が提供された。郡山市は、農水産物の販路拡大や風評払拭を図るとともに、認知度向上や誘客にもつなげたいと、品川萬里市長が同社を訪れ同市の食材や観光資源をPRした。

20日

《川俣町山木屋の田んぼリンク、今季の一般開放スタート》

原発事故に伴う避難指示が2017年3月末に解除された川俣町山木屋の田んぼリンク「絹の里やまきやスケートリンク」が、今季の一般開放をスタートした。1984年に開設された田んぼリンクは、避難指示に伴い一時閉鎖され、2016年に5年ぶりに復活した。厚さ10～15cmの氷が張った天然リンクに子供らの歓声が響いた。

《台湾から連続チャーター第1便、福島空港に到着》

訪日外国人観光客（インバウンド）の誘客促進を目的とした福島空港と台湾を結ぶ国際チャーター便の連続運航が始まり、同空港で到着第1便の歓迎イベントが行われた。台湾からは3月まで26便が運航し、約1,200人が来県する。2月から4月にかけては、ベトナムとの連続チャーター便の運航も予定されており、県などが現地で行き組んできたセールスが実を結んでいる。

21日

《広野町の伝統行事「<sup>ひやくやさい</sup>百矢祭」、7年ぶりに復活》

原発事故後中断していた広野町の伝統行事「<sup>ひやくやさい</sup>百矢祭」が、7年ぶりに町内折木の亀山神社で開催され、大勢の住民でにぎわった。300年の歴史がある同祭の復活のため、氏子らは「地域コミュニティの再生や町の復興につなげよう」と準備を進めてきた。7年ぶりの開催とあって境内には多くの住民らが詰めかけ、10人の氏子が約15m離れた的を目掛けて矢を放ち、厄払いや無病息災を祈願した。

25日

《県、ダボス会議で県産の日本酒や食材をPR》

スイスのダボスで世界経済フォーラム年次総会（ダボス会議）の関連イベント「ジャパンナイト2018」が開催され、県内6蔵元の日本酒や

郷土料理が振舞われた。福島県ブースに次々と訪れた来場者は、日本酒のほかニシンの山椒漬、紅葉漬などの味を堪能した。県は、世界各国の経営者や政治家、学識者らが参加するイベントで県産品の品質の高さや豊かな食文化をPRし、風評払拭につなげたいとしている。

《東北6県のイオンで小名浜のサンマ缶販売》

いわき市小名浜港に水揚げされたサンマを使った缶詰「さんま蒲焼」の販売が、県内5店舗を含む東北6県のイオン42店舗で開始された。県産水産物の安全・安心を広め風評を払拭するため、県漁業協同組合連合会と丸中漁業（いわき市）、イオンリテールが共同開発した。サンマは全国的に不漁が続いており、試食した同市の女性は「去年はサンマが高く食卓に並ぶ機会が少なかった。缶詰の味は美味しい。」と話し購入していた。

27日

《県などベトナムのフェスティバルに出展、観光誘客拡大へ魅力発信》

県とふくしま・ベトナム友好協会は、ベトナム・ホーチミンで開かれた第5回「ジャパン・ベトナムフェスティバル」に出展し、誘客拡大に向けて本県の観光の魅力をPRした。観光PR動画コーナーや磐梯山を背景としたフォトコーナーを設けた本県ブースには、閉幕の28日までに延べ5,000人超が来場し、盛り上がりを見せた。福島空港とベトナムを結ぶ連続チャーター便の運航が予定されており、ベトナムから多くの観光客訪問が期待される。

30日

《東北中央道効果、県境の交通量55%増加》

2017年11月に開通した東北中央道福島大笹生IC－米沢北IC間（35.6km）と国道13号を合わせた1日当たりの平均交通量は、県境で約1万2,400台に上り、開通前の前年同期と比べて約4,400台（55%）増えたと、国土交通省福島河川国道事務所が発表した。同区間の開通により、山形方面から福島市への来訪者数が増え、JRA福島競馬場で約3.3倍、飯坂温泉で約2倍となった。また、米沢市の上杉城史苑では観光客数が1.4倍となるなど、福島・山形の両県で観光交流人口が拡大している。